

平成17年度福井県経済社会活性化戦略会議第4回会議概要

《日時》	平成18年1月25日（水）	13:30～15:30
《会場》	福井県庁7階	特別会議室
《出席者》	天谷 祥子	学校法人天谷学園理事長
	有馬 義一	敦賀海陸運輸(株)取締役社長
	稲山 幹夫	稲山織物(株)代表取締役社長
	加藤 秀雄	福井県立大学経済学部教授
	新町 光示	(株)ジャルパック代表取締役会長
	馬場 修一	日本労働組合総連合会福井県連合会長
	三田村俊文	(株)福邦銀行取締役頭取
	三屋 裕子	(株)シャルレ代表取締役社長
	山本 雅俊	福井県副知事
	吉村 豊子	(株)吉村甘露堂取締役相談役
《欠席者》	堀田 健介	モルガン・スタンレー・リミテッド会長
	八木誠一郎	フクビ化学工業(株)代表取締役社長
	吉野 浩行	本田技研工業(株)取締役相談役

《会議概要》

○開会

〔西川知事〕開会に当たり、一言ごあいさつ申し上げる。皆様方には、ご多忙の中、平成17年度福井県経済社会活性化戦略会議第4回会議にご出席いただき、お礼申し上げます。

また、年末に開催を予定していた当会議が大雪のため開催が延期となり、皆様方に大変ご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。

さて、昨年は、本県においても、皇太子殿下をお迎えしての「第二十回国民文化祭・ふくい2005」の開催や北陸新幹線福井駅部の着工など、明るい話題の多い年であった。本年は、「元気宣言」の最終年次に当たる年であり、これまでに取り組んできた施策の仕上げを行い、成果を確実に示すべき年と考えている。

雇用情勢については、有効求人倍率が、全国平均を上回り1.26倍（全国第6位）であり、改善の動きが続いている。また、県内の完全失業率も全国に比べ低く推移している。新規高校卒業者の就職内定状況についても、好調な状況となっている。

本日は、特に「2007年問題」とフリーター・ニートの問題について、意見交換をお願いしたい。昭和22年から昭和24年生まれの「団塊の世代」が、2007年から順次定年で大量退職することから、各種の対策が必要となってくる。また、若者の就労意識の変化から生じているフリーター・ニートの問題に関する今後の対策について、意見交換をお願いしたい。

なお、ブランドや産学官連携などに関して、これまでの会議で皆様からいただいたご意見をもとに、現在、各部局において来年度の施策を含め、現在、検討しているところである。そうした対応状況についても後ほど報告させていただきたい。

〇２００７年問題

〔議長〕では、それでは、早速、議事に入る。

では、まず、「２００７年問題」について、事務局から説明をお願いする。

〔事務局〕資料１に基づいて説明

〔議長〕ただいまの説明を受けて、各委員からご質問等を含め、自由に発言をお願いする。

〔委員〕人材の確保対策で実施されている東京、大阪、名古屋での企業説明会は何回開催しているのか。そのうち県内企業への就職者数の実績はどうか。

〔事務局〕それぞれ１回開催している。就職者数は、企業探訪が６１名、ふくい雇用セミナーが１５６名、サマー求人企業説明会が９８名、合計３１５名である。

〔委員〕この２００７年問題は、若者にどれだけ企業に就職してもらうかが課題なのか、定年で退職される方の生きがい対策が課題なのか。何をどう話し合えばよいのか。若者と団塊の世代の問題は同じではない。

〔事務局〕企業のものづくりの技術をどう継承していくのか。若い優秀な技術者の確保が課題である。大都市圏の雇用情勢がよくなると、福井の若者が都会に出て行くこととなり、若年者の雇用が課題だと考えている。また、都会の退職者をいかにして福井で暮らしていただくかということも課題だと考えている。

〔委員〕そのことなら、アイデアがある。知人の残間里江子さんが団塊の世代について動向を調べられており、近年、全国では、「そばうち男」や「陶芸男」が増えてきているそうである。この世代は、そばか陶芸に興味がある人が多いらしい。自分を支えるものとして求めているとのこと。そばと陶芸は安っぽくなく、知的に見えるらしい。この２つは、どちらも福井にはある。団塊の世代には高度成長期を支えてきた自信と誇りがあり、そばと陶芸はそれを満たしてくれるらしい。今こそ福井が団塊の世代に受け入れられるチャンスであり、そうした切り口があってもいいのではないか。

〔議長〕団塊の世代の大量退職に伴い、労働力不足の問題が心配されるが、当面は、定年延長等で乗り切れる。ただし、将来は労働力不足が懸念され、どういうふうに確保するかが大きなテーマではないか。

〔委員〕少子化、ニート、フリーター、団塊世代の問題も一つの流れがある。高学歴の女性が増え、結婚が遅くなっているのが原因。女性のライフサイクルをある程度、指導すべきではないか。例えば、学生のときに出産し休学して、出産してから学校へ戻ればよいのではないか。１８歳から２３歳まで家庭にいて、その後に学校へ戻り、生きがいを見つけ社会参加し、再就職や企業を起こすなど。アメリカの中小企業の経営者の５０％以上は女性であるとのことである。また、そのほとんどが子育てを経験した女性である。子育てを経験した女性は、細やかな感性があり、企業も発展するのではないか。

また、子育てしている消費者に対して買い物ポイントをアップする企業などを、県民ぐるみで応援してはどうか。こうすれば、少子化の問題が解決し、兄弟が増えることでフリーターやニートの問題も解決するのではないか。

〔委員〕理想的な話だと思うが、困難ではないか。

〔委員〕全部はできないが、少しずつ変わっていくのではないか。何年か先を見越さないと。

〔議長〕出生率は上げないといけない。

〔委員〕年金が６０歳からの支給が難しいことや、６０歳の方でも今日バリバリ仕事ができることから、労働力不足の問題をどう解消していくかは大事な課題。また、若者にどう仕事をしてもらうのか整理しないといけない。教科書の勉強はできるが、社会の中でついていけな

い者も多い。教育も考えていかないといけない。地域社会とどうマッチングしていき、働く楽しさをどう教えていくかが問題である。

〔委員〕アルバイトが簡単にできすぎるのも問題。

〔知事〕学生結婚を奨励するという方法もあるのかもしれない。

〔委員〕少子化対策は必要。中小企業からは、技能の継承と高齢者雇用の問題は聞こえてくる。資料では、高齢者の40%の方が自分の能力が通用すると答えており、これをどう実現するかが問題。経営者は高齢者雇用を多くはできない。企業にとって必要な人だけ雇用したいという認識がある。多く的高齢者を抱える余力がないのである。役に立つ戦力となる人だけ雇用したいという意識である。経営者に高齢者雇用の問題をどう認識してもらうかがポイント。技能継承は、2007年問題でなく昔からの問題である。労働者も昔は、職人タイプが多かったが、現場は変化している。かつての技能継承ではなく、経営者は一歩進んで次に伝える能力を求めている。ここに難しさがある。高齢者雇用が大事だということを経営者に認識するよう県も支援してほしい。

〔委員〕2007年問題は否定的に捉えるのではなく、新しい価値観が出ていいのではないかという捉え方もできる。今は産業が労働集約型から技術集約型に変わっている。労働力が求められる世の中でなくなっている。生きがいの問題、社会保障の問題、企業年金、社会保障が追いつかないから働かせている。2007年問題は必ずしもマイナスばかりではない。本当の問題は何か、何が問題なのか捉えるべき。情緒的に捉えてもしょうがない。労働者が本当に不足するのか、個人の生きがいの問題はないか、何が問題なのかを冷静に分析すべき。否定的になりがちだが、どこにどういう問題があって、それを行政が行うべきかどうか分析すべき。

〔議長〕昔は、若年者が30%、40%いたが、今は高齢者と反対になった。それで財政的にも苦しくなった。

〔委員〕繊維産業はかつて集団就職の時代があり、今もその層の従業員が多い。今は、それを中国人労働者がカバーしている。繊維産業も基幹産業といいながら、高齢化の壁が来る。ただ、逆に団塊の世代が退職すると意外にすっきりするかもしれない。身軽になり、次の手が打てるのではないか。改まって考えるよりは、中小企業にとっては従業員の高齢化が差し迫ってきたと捉えている。

○フリーター・ニート対策

〔議長〕2007年問題は、テーマとして少し大きすぎたのかもしれない。続いて、フリーター・ニートについて、説明をお願いします。

〔事務局〕資料1（P12）に基づいて説明

〔議長〕ただいまの説明を受けて、各委員からご質問等を含め、自由に発言をお願いします。

〔委員〕先日、敦賀市内の小学生が会社見学に来て港を案内したところ、大変、喜んで帰った。お礼状も送られてきた。というように中学生の頃からではなく、小学生の頃から職場を見学させてはどうか。小学生の頃から将来の夢を持つものであり、小学生の間にいろいろな職場を見学させることも大事ではないか。

〔委員〕ニートの原因は何か。

〔事務局〕引きこもりにより、社会的に接点がないことである。

〔委員〕引きこもりの原因は何か。

〔委員〕ニートは、社会的適応力がなく、一種の病気であると思う。いじめによる不登校など

が原因である。世の中に出てからニートになるのではない。学校から引きずっている。ニートとフリーターは違う。ニートに対しては、窓口というよりもっと幹のところである不登校や学校の問題をなんとかしなくてはいけない。相談窓口だけでは、行政側の自己満足ではないか。完全解決にはならない。不登校、いじめの原因は、本人が弱いのか、親の甘やかしか。ニートについては、そういう点の対策をしないとイケない。

〔委員〕ニートはコミュニケーションの問題であり、フリーターは経済環境の問題である。県内の完全失業率、求人倍率は全国に比べて非常によい。フリーターの少なさにつながっている。フリーターを考える場合は、産業振興がポイントとなる。フリーターを減らすためには、産業振興が大事。

〔委員〕フリーター・ニートも大事だが、就職後の離職者にも着目しなくてはイケない。そういうところもどういう状況なのか捉えないとイケない。

〔委員〕フリーターが増えれば増えるほどニートも増える。

〔委員〕企業側からすると、人件費等の固定費を少しでも圧縮したい。そのため、誰、彼とは採用できない。

〔委員〕企業が求める人は能力の高い人。競争社会であり、優秀な人を求める。

〔委員〕パフォーマンスをどうとらえるか。無機質でなくホスピタリティあふれるパフォーマンスをどう求めるか。社会の状況と企業の状況が両極端になってきている。

〔議長〕ジョブカフェは完全雇用のための施策の1つだと思う。

〔委員〕フリーターは、コミュニケーション能力不足である。最近、先輩から食事に誘ったりする働きかけが少ない。先輩が心配りをすれば辞めないと思うが、先輩側も忙しい。余裕がない。だから早く辞めてしまう。話し合いが職場内にない。調理業界もコミュニケーションがなく、若い人は落胆して離れている。

〔議長〕結局は、教育になってしまう。会社も部下の面倒を見る人が少なくなっている。

〔委員〕時間的余裕がない。

〔委員〕人づくりが家庭から学校、学校から企業に移ってきており、それが原因でミスマッチが生じている。ニート・フリーターも家庭教育に行き着くのか。

〔委員〕今は、親も甘やかしてしまっている。それで、フリーターになってしまう。子にも甘えがある。

〔委員〕福井新聞のf uを見ていたら、県外の大学に行くことを引き止めるには、車を買ってあげることだと書いてあって、うなずける場所があった。

〔委員〕若者は自分に合った仕事を探してしまう。配属した仕事に自分を合わせないといけなのに。自分に合った仕事を世の中が用意してくれると勘違いしている者もいる。愚痴を親や周囲が許してしまっている。仕事に自分を合わせて頑張るという教育をし直さないといけ

ない。

〔委員〕仕事はマイペースではなく、ユアペースを知らないといけ

ない。

〔議長〕ここで、ジョブカフェの現状について説明をしていただく。

〔事務局〕聞いているとその通りだと思う部分とそうでないと思う部分があった。ジョブカフェには、1日40人以上の若者が来所するが、来所する若者は総じて自信がなく、消極的である。しかし、話をすると全然違う。本人達の能力がないのではなく、意識を変えることが大切で、その経験が乏しい。コミュニケーション能力がなく、自分の思いをうまく伝えられない。自分に合った仕事はどこにあるのではないかという意識が非常に強い。若者は経済的

に困っていない。現状ではフリーターでもいいけど、5年後、10年後はどうしたいのかというカウンセリングをすると、若者は気づいてくれる。経験がないので、今がよければという意識が強い。私がジョブカフェに来るようになってから思うが、子どものころから手伝い等をしていれば、ジョブカフェにも勢いをもって来れるのではないと思う。また、「仕事探しは自分探し」のコピーは、自分をよく知ってほしいという意味である。

〔委員〕家庭で衣食住を共にする時間がない。そうした意味で食育も大事。

〔委員〕家庭で話す場所と時間は大事。親も生活能力があるから、子どもたちが仕事につけなければなら、楽をさせてもいいという思いがある。学校に任せるのも大きな問題。先生にも時間的余裕がない。学校は卒業するだけというのではなく、教育の中で、将来、どう生活していくのかということ教える科目があってもいいのではないかな。子どものときから、ボランティア、社会参加をさせるべき。

〔委員〕資料では、42%はアルバイトを続けたいと言っている。ハングリー精神がない。

〔議長〕子どもに親の働いている現場を見せることも大事。

〔委員〕今の親は高度成長期の成功者が多い。子どもにしたら、親を超えられないと思っている。昔は、親を超えられたのに、今は超えにくくなっている。そういう世の中の価値観が変わらない限り、フリーターの問題はなくなる。

〔委員〕親のフリーターも現実に出てきている。その具体策は出てこない。

〔委員〕福井県としては、どういうことができるのか検討したい。そばや陶芸などをどうビジネスにつなげていくのか考えたい。全国で団塊の世代の退職金が7兆から8兆円となるらしい。この団塊の世代をどう活用するのか考えると面白い。また、少子化も分析しないとけない。天谷さんの意見には大賛成。それをどう仕組んでいくのか。

〔委員〕女性の総合職が導入された時点から少子化が始まった。

〔委員〕ジョブカフェは成功例だが、ジョブカフェでは根本原因の解決はできない。企業は以前から考えている。10年前からの課題である。行政がそれをやっていたら、他にすることはいくらかもある。欧米では、オープンハウスがある。年1回から2回従業員の子どもの親の職場を見せている。企業の社会責任である。

〔委員〕永平寺の門徒は約800万人といわれている。この人たちに福井県のPRをしてはどうか。永平寺をもう少し活かすべき。福井には独特のものが生まれると思う。

〔委員〕インターンシップは福井らしい制度である。

〔議長〕ますますやってほしい。

〔委員〕企業にも努力と賛同いただきたい。学生時代のインターンシップは重要。

〔委員〕福井県を知れば知るほど、「実は福井」という面白い中間商品が数多くある。これをキーワードにしてはどうか。カーナビのほとんどの部分を製作している企業やNASAの部品を扱っている企業などがある。大企業の末端にいるより、福井県で最先端の分野にいる方がいいのではないかな。そういう企業をもっとPRすべき。そうすればプライドも出る。県民も子どもたちもそうしたことは知らない。子どもが夢を持てるようPRすべき。「実は」は、「ZITTER」というようなブランドにすべき。「実は…」が非常に多いのに、PRが足りない。

〔委員〕福井県は新幹線や空港がなくても生活がしやすい。福井県ほど、生活レベルが高い県はない。失業率も低く、なぜ、表に出せないか。

○閉会

〔事務局〕 貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。次回は３月末に開催したいと思うのでよろしくお願いします。

以 上